

氏名：

林 好一（はやし よしかず）

所属：

（株）SRA 産業開発統括本部 製造・組込システム部

主な関心分野：

- ・ソフトウェアプロダクトラインエンジニアリング（SPLE）
- ・ソフトウェアプロセス改善（SPI）

主な仕事：

「主な関心分野」に沿った支援

最近の主な仕事：

- ・製品ソフトウェアアーキテクチャの内部品質向上支援
- ・経験は長いが技法およびプロセスの知識が不足している製造企業の支援
- ・SPLE プロセス定義

最近の主なコミュニティ活動

- ・SPI カンファレンス・セミナー・ワークショップの企画・準備・運営
- ・派生開発推進コミュニティの立ち上げ、関連カンファレンス準備
- ・SPLE の紹介

当ワークショップに対するポジション：

ソフトウェアアーキテクチャ（以下単に「アーキテクチャ」）のサポートする品質は外部品質（ユーザーに可視な品質）と内部品質（主に開発者に可視な品質）に分ける。後者の主なものは保守性と移植性である。保守性はいかに変更を施しやすいかを表わすものであり、プロダクトライン開発では特に重要になる。この保守性に焦点を当てたい。

内部品質には保守性すなわち解析性、変更性、安定性、試験性が含まれ、これらが高い方が変更コスト（品質保証コスト含む）が低くて済む。これを達成するためには効果的な抽象化が必要で、これは情報隠蔽と表裏一体である。特に、製品間の違い（可変性）を局所に隠蔽できれば、SPL 向けアーキテクチャとして優れていると言える。

一方、企業による製品のアーキテクチャは、単に技術的に優れているだけでは足りず、事業面での様々な制約を反映しなくてはならない。例えば実装の大部分は外注するが、その際に発注元のコア技術が見える形にできない場合がありうる。また、前述の可変性を含む部分は、それを特定製品向けに固定する作業はリスクを伴うため、予め固定した仕様を作成してから外注するなどのプロセス調整を行わなければならない場合もあるであろう。

上述のような、企業として SPL アーキテクチャに関して気をつけるべきことを、他の参加者と討論したい。

もう一点、副次的であるが、情報交換の基準を意識しながら討論を行ないたいと考えている。とかく企業秘密の壁に阻まれ、社外での情報交換もままならない中、互いの状況の何が共通であるかが見えれば、そこまでは共有して良いことがわかり、より自由な情報流通が期待できる。組込みシステムは日本のものづくりの最後の牙城の一つであり、競合しない点でまで隠し合いをして相互学習の可能性をつぶしている間に他国に市場を奪われることを危惧している。